

実践!

経験やカンに頼らない 根拠のある認知症ケア 7

Q&Aで学ぶ コロナ禍の認知症の人への接し方

Q1

感染対策でコミュニケーションがとりづらくなりました。どうすればいい?

つねにマスクを着用し、ソーシャルディスタンスの呼びかけで、利用者との距離をあけるように意識しているためか、以前よりこちらの思いが利用者に伝わりにくくなったように感じます。



A ボディランゲージで、気持ちを表現しましょう

マスクをしていると顔が隠れる分、どうしても表情が伝わりにくくなります。また、高齢者は認知機能の低下で、マスクをしている人は、みんな同じ顔に見えることも。大げさと感じるくらい大きな身振り、手振りを添えてコミュニケーションをとりましょう。

お風呂に入りますよ

よくいらっしゃいました



ケアする際は、利用者との位置関係を工夫して

利用者と距離を保つことは大切ですが、遠くなれば当然声は聞こえにくくなります。話をする際は、利用者の真横や斜め後ろ、真後ろなど、飛沫が届きにくい位置を意識し、真正面を避けましょう。

こんな方法も 効果あり

職員の名札に写真を貼って、誰かを認識しやすくする

認知症の人は、名前と顔を一致させるのが苦手なので、相手の名札をよく見る傾向があります。ひとまわり大きくした名札にマスクなしの顔写真を貼っておけば、利用者は相手が誰かを認識しやすくなり、安心できます。



名札に好きな食べ物や趣味などを書いておくと会話の糸口になる。

経験やカンに頼らない

根拠のある認知症ケア

7 コロナ禍の認知症の人との接し方

監修 里村佳子



社会福祉法人呉ハレルヤ会 呉ベタニアホーム理事長。広島国際大学臨床教授、広島県認知症介護指導者、広島県精神医療審査会委員、呉市介護認定審査会委員。2017年、訪問看護ステーション「ユアネーム」(東京・荻窪)を開設。著書に「尊厳ある介護」(岩波書店)。

先行きの見えないコロナ禍で、私たちの暮らしは大きく変わりましたが、それは認知症の利用者も例外ではありません。強い不安とストレスを感じる利用者は多く、介護現場では今、ケアの思いがけない困りごとが生じています。感染に注意しながら、介護者がとるべき適切な対応について伺いました。

文/森麻子 イラスト/藤原ヒロコ

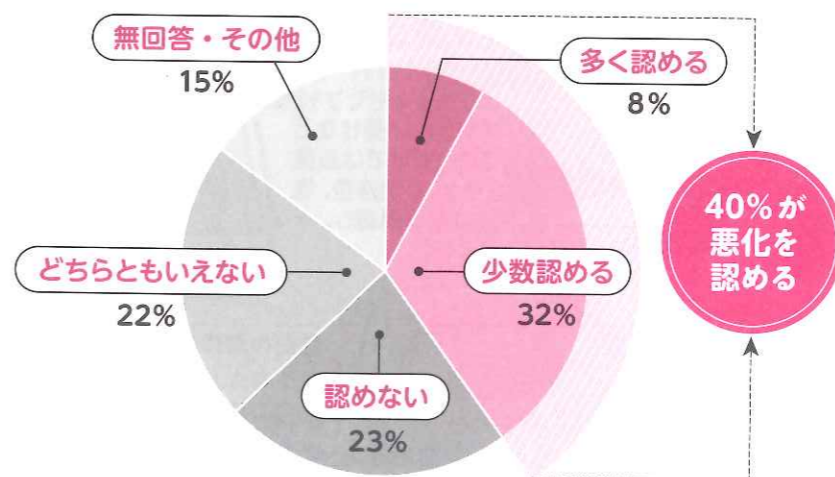
コロナ禍で認知症の症状が悪化!?

今まで行われてきた介護者と利用者とのコミュニケーションは、タッチングや正面から目を合わせての声かけなど、とても「密」なスタイルでした。しかし、新型コロナウイルスが感染拡大するなかでは、介護現場でも感染対策を講じながらコロナと向き合う、新しい介護スタイルへの変容を余儀なくされました。「マスク越しのコミュニケーション」「必要最小限の会話」「ソーシャルディスタンスの徹底」など、感染予防のためにはいずれも不可欠な対応です。

しかし一方で、このような介護スタイルの変化による影響が、認知症の利用者にさまざまな形で現れるようになってきました。日常会話や運動の機会の減少が、ストレスの増大や身体・認知機能の低下を招き、BPSD(行動・心理症状)が悪化したり、希死念慮(死にたいと願うこと)を抱いたりする人が増えてきたのです。認知症の進行を抑えるには、「運動」「食事(栄養)」「会話」の三本柱が欠かせません。感染予防に努めることは言うまでもなく、介護現場ではこの三本柱にも目を向け、利用者が過度のストレスを抱えないように配慮していきましょう。

新型コロナウイルス感染症流行後の認知症の人の症状悪化に関する調査

左のグラフは、新型コロナウイルス感染症の流行が認知症の症状悪化に与えた影響について、全国の認知症専門医に聞いたアンケート調査の結果。症状悪化を認めた医師が4割を占める。



悪化した症状の例

- 認知機能の悪化
- BPSDの悪化
- 合併症の悪化
- うつ症状の悪化
- 筋力低下 など

調査期間/2020年5月25日から2週間
対象/日本認知症学会専門医357人

出典:「日本認知症学会専門医を対象にした新型コロナウイルス感染症流行下における認知症の診療等への影響に関するアンケート調査結果報告」(日本認知症学会)をもとに作成